奮戦記

感謝

79期 藤田拓翔

・体操部

我が母校が創立九十周年を迎え、誠に喜ばしいことと思います。またこの度、執筆させて頂くことを光栄に感じております。高校時代は、家族よりも長い時間、共に過ごした仲間や監督との部活動に明け暮れた日々を思い出します。私は体操部に所属していましたが、当時のことを思い返すと今でも手には汗を滲ませます。

高校3年間ではインターハイや全日本ジュニア、秋田国体など数々の大会に出場することが出来ました。その中でも一番印象に残っているのが3年生のときのインターハイです。抽選により第1班の午前8時からの試合となり、強化合宿は本番を想定してスケジュールが組まれました。朝4時半に起床してから朝ごはんのメニュー、移動中に聞く音楽、アップの内容まで面白いくらい事細かに決められていました。まるで洗脳されているかのようでしたが、これにより成功のイメージを刷り込むことができたのだと思います。大会は8月の暑い時期でした。選手の声援や全国の名門校に向けられた応援などで会場が揺れ、ものすごい熱気に包まれていました。立っているだけで押しつぶされそうなそんな中、いよいよ自分の順番が来ました。心臓はドクドクと脈打ち、血液が毛細血管にしっかりと流れていることが分かるくらい緊張していました。しかし、不思議と成功するんだろうなという予感がしていたことと、これまでにないくらい冷静だったことも覚えています。審判に手をあげて器具に飛びつき演技を開始すると、体は勝手に動きまるで誰かに操られている感覚でした。体が動きを覚えていたというか、練習と同じように演技する事が出来ました。着地のポーズを決め演技が終了すると、自然と拳に力が入り心の中では「よっしゃ！」と、ただただ成功の喜びがこみ上げました。仲間とのハイタッチも最高の瞬間でした。後々になって、苦手だった朝早くからの試合のために調整したことも、つらい練習を諦めずにやってきたことも本当に良かったと思いました。「天国はどこにあるか分かるか」監督の言葉です。「天国は地獄の先にあるんだよ」。達成感や喜びは、死ぬほどの苦労を乗り越え、まさに地獄を通った者にしか訪れないという意味です。他の人が聞いても意味の分からない言葉かもしれませんが、そのときの胸の高鳴りというか雰囲気なども含め、私の胸には深く刻まれています。

激動の高校時代を、私一人では乗り越えられなかったと思います。支えてくれた仲間や監督、家族や応援してくれた方々には、本当に感謝しています。そして、今の自分があるのも、この能代高校での経験があったからこそだと感じております。部活動に明け暮れた日々は私のかけがえのない宝物となりました。私は、伝統と歴史ある能代高校体操部の一員であったことを誇りに思います。そしてその誇りを胸に、これからの人生も前を向いて歩んで行こうと思います。

体操部

柔道部

目標を持つこと

83期　近藤大地

この度は能代高校創立九十周年おめでとうございます。私が卒業したのが、ついこの前で、まだまだ高校時代の思い出が頭の中に鮮明に残っています。

高校時代、柔道部に所属し、柔道に明け暮れた日々を過ごし、部活動を理由にして、課題をサボり何度も先生から怒られていました。能代高校柔道部と言えば、過去に何度もインターハイに出場している学校であり、入学と同時に「インターハイ出場」を目標に日々の練習を頑張っていました。当時の監督は、長い練習を好まず、短く密度の高い練習を心掛けていました。しかし、すぐに目標達成することができず、監督とぶつかったこともありましたが、それでも監督を信じ続けて、3年生の時、個人でインターハイに出場することができました。この結果は、監督や部員、保護者など多くの人の支えがあってのものです。一人で目標を達成することはできません。本当に支えて下さった方々に感謝をしています。

ここで、高校時代を振り返る中で、後悔している点があります。それは、もっともっと勉強しておけば良かったと思うことです。私は全く勉強せず、柔道ばかりで課題をやらないといった、本当にダメな生徒でした。今になってあの時しっかりやっていたらなと後悔することがあります。大学に入学して、周りの学生とレベルが違いすぎて、高校時代の勉強の大切さを痛感しました。

後輩の皆さんは、高校で過ごす3年間を無駄にしないで下さい。勉強でも部活動でも何か目標を持って過ごすことで、生活の質が変わってきます。3年間は本当にあっという間です。楽しいこともつらいこともたくさん味わうことができる貴重な時間です。目標を持ち、成し遂げた時の一回り大きく成長した自分に出逢えるように頑張って下さい。

空手道部

空手道部として

85期　福岡慎吾

能代高校創立九十周年おめでとうございます。私がこの歴史ある能代高校に入学し空手道部に入部したのは、男子団体組手で創部以来初の全県総体で優勝すること、個人形で優勝しインターハイに出場するという目標を達成するためです。運の良いことに私を含めて有段者が3人おり、同学年に他2人入部してくれ5人の団体メンバーが揃いました。この5人を中心に切磋琢磨し、日々練習してきました。また、私は並行して形の練習も続けました。部活動終了後の自主練習や幼い頃から通っている道場での稽古に励みました。

そして6月、最後の全県総体初日、4チームリーグ戦で行われた男子団体組手。初戦の秋田工業戦、2戦目の能代松陽戦と危なげなく勝利し、最終戦、宿敵男鹿工業戦をむかえました。男鹿工業の独特な戦術に打ち勝つために練習を重ねてきました。先鋒・渡辺は引き分け、次鋒・加藤は敗戦、ともに善戦しましたが0―1の状況で中堅である私に回ってきました。私はすべてを出しきり勝利し1―1とし副将・笠原に託しました。善戦しましたが敗戦で1―2。続く大将・菅生が引き分け。結果、1―2で敗れました。あっという間の出来事でした。

最終日の個人形では順当に決勝までいき、準優勝でしたが2年連続のインターハイ出場を決めました。

個人ではインターハイに出場しましたが団体では悔いが残りました。しかし、この3年間は全て私の誇りです。これからの人生の糧

としていきます。3年間支えてくれた顧問の先生方、コーチ、部員、家族には心から感謝しています。今後の能代高校空手道部のさらなる活躍を期待しています。

空手道部全県総体

・弁論部

言葉のスポーツで鍛えた日々

76期 浅野結子

弁論部は寝ない。高校時代、夜遅くまでインターネットで資料を探したり、本を読んだりと夜更かしが得意だった。大会期間中には、宿泊先のホテルの一室に集まり、夜を徹して議論を重ねた。その伝統とも呼べる光景は、私が能代高校を卒業して10年が経つ今でも受け継がれている。

弁論部が目指すのは、6人1組のチームで出場する「ディベート甲子園」と呼ばれる夏の全国大会。毎年のように東北予選を通過し、全国大会に出場している。過去最高の成績は、私が2年生の時に先輩たちが成し遂げた準優勝だ。

ディベートは、「言葉のスポーツ」とも呼ばれる。一つのテーマについて肯定と否定に分かれて「立論、質疑、第1反駁、第2反駁」といった一連の流れで議論を展開し、それぞれの立場の主張の正当性を訴える。どちらが、よりジャッジを納得させられるかを競うものだ。

毎年発表される論題は、日本が抱えているタイムリーな問題に焦点が当たる。「安楽死を法的に認めるべきか」「原子力発電を代替発電に切り替えるべきか」「炭素税を導入すべきか」――。私が在学した3年間は、大人になった今でも難しいと感じる問題だったが、当時、高校生なりにその論題と向き合ってきた。

部員は毎年15人前後と少数精鋭だったが、大会登録メンバーに限らず、一丸になって資料探しに励んだり、主張の共通認識を図ったりまたOB・OGとのつながりも強く、大会期間中には先輩たちが激励に訪れ、アドバイスをくれることもありがたかった。

ディベートを通して、物事には必ず良い面と悪い面があることを知った。メリット・デメリットを理解した上で、課題を解決していく方法を考えるようにもなった。高校3年間で学んだことが、私の今の仕事にもつながっていると思う。

地元新聞の記者になって5年が経つ。毎年、後輩たちの活躍を取材し、伝統の灯火が絶えず続いていることを誇らしく思う。これからも「甲子園」での活躍を期待しながら、日本一に輝く後輩たちを取材できる日を楽しみにしている。

・弁論部

弁論部の〝甲子園〟の思い出

77期 伊藤正孝

能代高校校舎3階にある弁論部の部室には、「ディベート甲子園」（全国中学・高校ディベート選手権）の出場校に贈られる記念

のピンバッジが飾られている。歴代部員が引退する際に残したもので、全国大会出場14回（2015年4月現在）を誇る部の歴史を物語る存在でもある。9年前に高校3年生だった私も、あこがれの〝甲子園〟の舞台を目指した一人だ。ディベートに熱中した日々のことは、今も鮮明に覚えている。

弁論部が取り組むディベートは、一つの論題に対して、その場で肯定側と否定側に分かれて第三者の審判を説得する形で議論し、その優劣を競う。06年度大会の論題は「日本は道州制を導入すべきである。是か非か」。都道府県をより広域の道や州に再編する「道州制」の是非を論じるため、書籍や論文を読み込み、説得力のある論を練り上げることに夢中になった。

ディベート甲子園出場権を懸けた東北地区予選で準優勝し、東北第2代表として臨んだ本大会には全国32校が出場。予選リーグ、決勝トーナメント1回戦、準々決勝を勝ち上がり、準決勝で同じ東北勢の会津高校（福島）と対戦した。審判員5人による判定の結果、2―3で敗れたものの、大舞台で充実した論戦を繰り広げることができた。04年の準優勝に次ぐ3位入賞は、バックアップに回った控えメンバーを含め部員14人全員がベストを尽くした成果だ。

大会では、全国から駆けつけた大勢のOBやOGからたくさんの激励とアドバイスをもらった。毎年行われているOBらによる無償のサポートは、能代高校弁論部の「強さの秘訣」とも言える。OBらの母校への恩返しの形の一つであり、青春を懸けたディベートへの愛着や感謝の表れなのかもしれない。

私自身ディベートから得たことは数え切れない。人の話を聞く力、人前で自分の意見を伝える力、最後まであきらめない粘り強さ…。何より、一緒に戦った仲間は今でもかけがえのない存在だ。大切なことをたくさん教わった弁論部に、これからも何か恩返しできればと思っている。

平成25年度東北地区中学・高校ディベート選手権

放送部

部活動奮闘記

80期　金平　理恵子

私は、3年間放送部に所属しておりました。「放送甲子園」と呼ばれる夏のNHKコンテストに向けて、放課後も昼休みも部室に通い、次の大会に向け企画は何にしようかと会議をしていました。おしゃべりが9割だった気もしますが、今思うと、よく飽きもせず同じメンバーで集まっていたなと思います。

そして我々が出会った取材先の方々は、本当に温かい人々でした。能代山本の食材を活かし地産地消の店を開いた方をはじめ、夢をあきらめずオリンピックに出場された能代高校の先輩、地域に住む外国人やその子供たちに献身的に日本語教育を行う先生、他にも多くの方々にカメラとマイクを向けさせて頂きました。どうすればこの人たちの熱い想いが伝わるのか、自分たちが体験した感動を見た人に届けられるのか。自己満足で終わらない

ために、何度もなんども構成してはやり直しました。それがたった1分のＶＴＲであっても、一つの言葉であっても、妥協を許さないメンバーでした。

私たちは、周りから見るとただの仲良しグループに見えていたかもしれません。でも実際は、何度も険悪になっていました。お互いが納得するまで、言い争っていました。決して順風満帆な毎日ではありませんでしたが、あの苦しさがあったからこそ、番組が完成した時の達成感は言葉にできない喜びがありました。

結果として、秋は東北大会、夏は夢であったＮＨＫ杯と全国高等学校総合文化祭に出場を果たすことができました。そして私が何よりも嬉しかったことは、仲間との頑張りが認められたことです。私たちが伝えたかった思いを伝えられたことです。

私は部長を務めておりましたが、仲間や後輩に助けられてばかりでした。うまくまとめられずに迷惑をかけてしまったことも多々あったと思います。それでも、終電の時間まで残り、休みの日に登校して撮影し、放課後に取材先のボランティアに通い続けてくれた仲間には、本当に感謝しています。頑張り屋さんが多く、私も負けられないとみんなが思っていました。

その思いは高校を卒業した今でも私を支え続けてくれています。皆住む場所が違い、なかなか会えなくなってしまいましたが、今もどこかで頑張っている仲間に会った時に恥ずかしくないよう、今の仕事を頑張ろうと思っています。部活動を通して経験した楽しかった日々は、今も私の原動力です。

無線部

ＡＲＤＦに魅せられて

83期　平川百佳

私の所属した83期無線部は主にＡＲＤＦ（アマチュア無線方向探査）に取り組みました。ＡＲＤＦは簡単に言うと、地図・コンパス・受信機を用いて山野に設置された送信機を探索する競技です。今回はその練習と大会の思い出について綴ろうと思います。

平日は学校周辺、土曜日は風の松原へ足を運び本番により近い環境で練習に励みました。機械を手に走り回る私たちの姿は傍から見れば奇怪に映ったのでしょう、地域の方々に何をしているのかとよく声をかけられました。また、「新聞見たよ。頑張ってね」と言って下さる方もいらっしゃいました。私たちの活動によって日本ではマイナー競技であるＡＲＤＦの認知度が少しずつ向上しているということと、温かく見守り応援して下さる地域の方々の気持ちが大変嬉しく、励みになりました。

デビュー戦から最後の大会に至るまでどの大会もそれぞれ思い出がありますが、特に印象深いのは高校2年生の時に出場したアジア・オセアニア大会です。この大会はオーストラリアで開催され、私にとっては初めての海外でした。競技前に緊張し、心細かった時には、日本選手団の方々が心の支えになって下さいました。競技中に苦しかった時は、出

平成23年度ＡＲＤＦアジア・オセアニア大会団体優勝

国前に応援してくれた仲間や友達の顔が浮かび、再び自分を奮い立たせることができました。そして、競技後には未だかつてないほどの達成感を味わうことができました。また、オーストラリア滞在中に異国の文化に触れたり、現地の方や海外の選手とうまく意思疎通をすることができたりと、沢山の貴重な経験と大切な思い出ができました。この大会での体験がＡＲＤＦを生涯続けていきたいと思うきっかけになり、大学に入った今も様々な大会に参加しています。

私がこのように思うことができたのは先輩や後輩をはじめ、互いに高め合い、一緒に過ごした最高の仲間と、支えて下さった顧問の先生方、並びに応援して下さった皆様のお陰だと思っています。そして能代高校に入学し、無線部に入部してＡＲＤＦと出会えたことに心から感謝しています。

無線部

三年間を振り返って

85期　渡部晶子

私は全国大会や世界大会で活躍している先輩方に憧れて、無線部に入りました。入部当初は学校周辺を迷ってばかりで、慣れるまでにとても時間がかかりました。

先輩方からたくさんアドバイスをいただき、大会で全てのＴＸを見つけることを目標に練習をしました。初めての全国大会は、経験したことのない緊張感の中「全て見つける」と頭の中で繰り返しながら走りました。競技中は、自分でも信じられないくらいに適切な判断をすることができ、順調にＴＸを見つけていくことができました。結果は2位で、全国大会の表彰台に立っていることに感動したのを今でも覚えています。

2年生の時には、韓国で行われたアジア・オセアニア大会に出場しました。初めての外国ということもあり、楽しみと不安でいっぱいでした。大会では、全力を尽くすことと無事にゴールに辿り着くことを意識しました。全国大会よりも山が険しく、道のない急斜面を駆け下りたりしました。競技終了後にいくつか反省点が見つかりましたが、結果は団体優勝となり、とても嬉しかったです。また、大会を通して他の日本代表の選手や海外の選手との交流も深められ、貴重な経験をすることができました。

3年間を振り返ると、自分が持っている力を十分に発揮できた大会や、判断に迷って後悔ばかりが残ってしまった大会などがありました。たくさん喜び、たくさん悩み、何度も大きな大会の緊張感を味わい、精神的に少し成長することができたと思います。共に練習に励んだ無線部のみんなや指導してくださった鈴木先生、応援してくださった皆さんには本当に感謝しています。これからも目標に向かって努力する姿勢を忘れずに、何事にも一生懸命に取り組んでいきたいです。

文芸部

中庭の木

82期　浅野大輝

文芸部の部室の窓からは、ちょうど中庭の木が見える。何という名前の木かは知らない。中庭の湿っぽい地面に確かな根を張って、校舎と同じくらいの高さの身体を支えている、木。放課後、晴れていたなら葉の隙間から夕日が差し込むのだけれど、その夕日は淡く、部室は少し薄暗い。そんな風景の中で、僕らの文芸部は活動していた。

僕らは放課後になると決まって部室に集まった。そうして他愛もない会話をした。机が一つしかなくて、ぎりぎり全員が座れるくらいの長椅子がある、そんな部室で。会話の

内容は、専ら最近それぞれが興味を持っていることだとか、悩んでいることだとかで、創作の話は締め切り前でもない限りめったに出てこない。だけど、そんな他愛もない会話の中で僕らは互いの思考に触れ、それが各々の創作に少なからず影響していた。

文芸は、ほんの少し薄暗いものだと思う。孤独な表現形式であると思う。作品を作っているときは限りなく一人で、ひたすらに自分の創作に向き合うことになる。ただ、創作の手を緩めて顔を上げたとき、そこには他愛もない会話から時々は真剣な創作の話まで、面と向かって話せる文芸部の面々がいる。僕にとって（そしておそらくは彼らにとっても）文芸部とはそうした拠り所となってくれるものだったし、そんな文芸部の確かだけれども穏やかな関係性があったからこそ多くの作品や功績に恵まれたのではないかと、今は思う。

文芸部の部室の窓からは、ちょうど中庭の木が見える。何という名前の木かは知らない。だけど、目を瞑れば今でも思い出せる。葉の隙間を縫う夕日は、部室までは入ってこない。けれどその明るさが、ぼんやりと窓に滲んでいる。もうずいぶん遠くまで来てしまったけれど、文芸部での日々が、経験が、今の僕を支えてくれる。中庭の木を思うとき僕の、僕らの放課後は今につながっている。

軟式野球部

全国優勝は大きな財産！

81期　加賀屋　至

能代高校創立九十周年おめでとうございます。私は、軟式野球部に所属し、平成22年に28年ぶり2回目の全国制覇の栄冠を勝ち得ることができました。全国優勝ができたのは、地域の方々や能代高校ＯＢの方々をはじめ、たくさんの温かい声援やご支援のおかげだと考えています。

全国大会では、じりじり照りつける関西特有の日差しの暑さに苦労し、試合では何度もピンチの場面がありましたが、スタンドの応援に大きな力をもらい乗り越えることができました。チャンスのときには勝利を呼び込むダンスでスタンドが揺れ、ピンチを脱したときには全員が立ち上がって拍手と歓声で迎えてくれました。決勝戦のサヨナラ勝ちの瞬間は、選手と同じように抱き合って喜ぶスタンドの光景は決して忘れないと思います。準決勝の中京戦では、延長15回でも決着がつかず次の日に継続試合になり、日程がずれたため、父親が決勝戦を見ることなく帰ったことも今となっては良い思い出です。夢にまで見た明石球場のマウンドに立てたこと、3年間共に頑張ってきた仲間や監督、コーチの方々と優勝できたことは私の大きな財産になりました。

私は、今年から大学を卒業して社会人として働きはじめました。能代高校での生活を通して学んだことを活かして、支えてくださった方々に少しでも恩返しができるように、そして、能代高校の校訓「至誠力行」に恥じぬよう社会で頑張りたいと思います。

○一回戦　8月26日
ＶＳ初芝富田林（大阪）　2―0

平成22年度全国高等学校軟式野球選手権大会
決勝新田高校戦サヨナラ勝ち

○準々決勝　8月27日
　VS羽黒（山形）　8―4
○準　決　勝　8月28日
　VS中京（岐阜）　0―0
　　延長15回引き分け　継続試合
○準　決　勝（2日目）　8月29日
　VS中京（岐阜）　1―0
　　延長18回サヨナラ勝ち
○決　　勝　8月30日
　VS新田（愛媛）　1―0

軟式野球部

再び明石へ

82期　斉藤　大

全国大会優勝。これは先輩方が成し遂げた記録です。少なくとも、私が能代高校軟式野球部に入部した時には全く想像していなかったことでした。

全国優勝してから2か月、私たちは秋季地区大会の1回戦を迎えました。結果はコールド負け一歩手前の大敗でした。しかし、この敗戦が私たちに自分たちの実力を教えてくれました。変えなければならないことを教えてくれました。「また明石球場でみんなと野球がしたい」この一心で、監督、部長、コーチの指導の下練習に取り組みました。迎えた夏季地区大会、北東北大会では厳しい試合ばかりでしたが、どちらも優勝することができました。誰か一人でも欠けていれば成し得ないことでした。どの試合を振り返ってもそう感じています。

そして全国大会。開会式で入場行進をしている時、再びこの地で仲間と野球ができるのだと高揚したのを覚えています。初戦は初芝富田林高校に6―3で勝利し、2回戦は全国大会常連校である作新学院高校との対戦です。6回まで0―0の接戦でしたが、7回の裏に1点を失い、そのまま逆転することができずに0―1で敗れてしまいました。目標としていた全国大会2連覇の夢は全国ベスト8という結果で幕を下ろしました。

私たちは能代高校軟式野球部で多くのことを学びました。これからまた新たな目標に向かっていく中で必要となる、多くのものを得ました。なにより、夏を共に戦った大切な仲間と出会えました。能代高校軟式野球部に所属できたことを誇りに思うと同時に感謝しています。最後になりましたが、私たちが野球に集中できるように最高の環境を作ってくれた保護者の皆様、全国大会の会場である明石まで届く力強い応援をしてくださった地域の皆様、能代高校の皆様、他にも多くの方々のサポートがあって初めて全国大会でベスト8に入賞することができました。部員を代表して感謝を述べさせていただきます。本当にありがとうございました。

軟式野球部

目標の明石へ「伝説の第59回大会」

85期　相澤　秀弥

2014年8月、我が軟式野球部は第59回全国高等学校軟式野球選手権大会に出場いたしました。3年ぶりの出場となりましたが、決して順調な道のりではありませんでした。

新チームになってからの秋季大会、翌年の春季大会では、ともに県予選の決勝にすら進むことが出来ず、チームは完全に目標を見失っておりました。しかし、これまでの辛かった日々の練習の積み重ね、監督さんたちの熱血指導により、チームは少しずつ調子を取り戻し始めました。夏の本番直前にはチームの雰囲気も調子も良くなり、勝つ試合運びの出来るチームに成長しておりました。

こうして自信を持って迎えた本番の夏の大

会では、ほとんどの試合を接戦で勝ち進み、県大会を制し北東北大会に駒を進めることが出来ました。八戸市で開催された北東北大会でも、我がチームは県大会を制した勢いのまま接戦を勝ち進み、決勝は逆転勝利でついに念願の明石への切符を手にすることが出来ました。

「軟式の甲子園」と呼ばれる明石の舞台は本当に夢のような場所でした。1回戦を勝ち進み、準々決勝ではあの伝説となった延長50回を制して優勝した中京高校に0―1で惜しくも敗れはしたものの、私にとっては悔いのない最高のかたちで試合を終えることが出来ました。また全国ベスト8という成績により、長崎国体にも出場することができ素晴らしい経験もさせていただきました。これまで自分達を応援して下さった方々、また支えて下さった方々、すべての方々への感謝の気持ちは絶対に忘れません。本当にありがとうございました。

また、今大会で中京高校と崇徳高校の延長50回の試合が野球殿堂入りし、高校の軟式野球が全国的に広まった事をとても嬉しく思いました。そして自分の能代高校軟式野球部がその伝説となった大会に出場し、その中京高校と接戦を演じられた事をとても誇りに思います。伝統ある能代高校の卒業生の一員として、私もこれから大学生活、また社会人として頑張ってまいります。

最後になりますが、能代高校創立九十周年、本当におめでとうございます。今後の母校の益々の発展と活躍を期待しております。

書道部

全国大会に出場して

3年　田中麻友

この度は能代高等学校創立九十周年おめでとうございます。記念すべき節目の年に執筆させていただくことを大変嬉しく思います。

私は全国高等学校総合文化祭に出場するという目標を持って書道部に入部しました。

高校1年の時に第46回秋田県高等学校総合美術展・書道部門において特賞を受賞し、第38回全国高等学校総合文化祭「いばらき総文2014」に出品する機会をいただきました。この大会に出品するにあたり紙が半切から縦8尺×横2尺の和紙へと大きくなり、臨書字数も増え、「書譜」についての理解をさらに深めなければなりませんでした。「書譜」の特徴である、柔らかな中にも力強さがある線質を表現した作品を書き上げたいと思い、納得のいくまで今まで以上に懸命に筆を運び作品を仕上げました。

茨城県水戸市で行われた交流会では、茨城ゆかりの徳川光圀にちなんで「印籠に蒔絵」「ミニ大日本史へ寄書き」を体験しました。秋田県の代表であるとともに能代高校生であるという誇りを持ち、この印籠に能代高校の校是である「至誠力行」の文字を筆入れしました。

また、茨城県立県民文化センターにおいて全国から選抜された313点の展示作品を鑑賞しました。そして全国の書道部員の書に対する姿勢や思考、技術などに刺激を受け、改めて書道の魅力を体感しました。

この経験を部員の作品意欲向上につなげ、平成26年度は、全県席書大会金賞6名や県の高校美術展推奨・入選、産経ジュニア書道コンクール奨励賞、秋田県新春書初め席書大会、税に関する作品など各種大会で入賞することができました。

顧問の平川先生はじめ諸先生方、共に活動してきた書道部員に感謝し、私自身、これまで以上に書道に精進していく所存です。

書道部の更なる活躍を期待しています。

平成27年度 部活動所属人数・顧問一覧

〔平成27年5月現在〕

体育局

部名	顧問	人数	男	女
硬式野球	石井 勇悦 牧野 嘉訓 斉藤 崇朗	66	60	6
軟式野球	平田 有宏 今畠 寿樹 堀内 大介	36	32	4
ソフトテニス(男子)	藤嶋 健	11	10	1
ソフトテニス(女子)	佐藤 弘和	13	0	13
サッカー	吉田 英亮 石黒 翔之	28	22	6
バスケットボール(男子)	塚本 真嗣	30	27	3
バスケットボール(女子)	杉澤 斉	25	0	25
バレーボール(男子)	戸沢 直樹	27	22	5
バレーボール(女子)	成田 康仁	18	0	18
卓球	成田 司	18	11	7
柔道	畠山 翔	10	7	3
剣道	五十嵐浩英 金森 康臣	17	7	10

部名	顧問	人数	男	女
体操	大塚 孝幸	8	7	1
陸上競技	太田 研 工藤 武大	27	15	12
水泳	原田 由佳	2	2	0
空手道	佐々木政則	29	19	10
応援	浅野 朋央 大塚由美子	5	3	2

文化局

部名	顧問	人数	男	女
新聞	山﨑 静	3	3	0
文芸	浅野 聡	6	1	5
演劇	日景 聡	26	5	21
吹奏楽	鈴木 亜希 高橋 理	49	6	43
写真	浅野 聡	9	3	6
美術	加賀 素子	23	2	21
放送	伊勢奈緒子	18	3	15
無線	鈴木 道生	29	15	14
科学	伊藤 孝義	12	9	3
囲碁・将棋	佐藤 寿志	15	12	3
茶道	須藤 規子	12	1	11

生徒会

部名	顧問	人数	男	女
生徒会	高橋 理 石黒 翔之 鈴木 道生 塚本 真嗣 大塚由美子	35	13	22

部名	顧問	人数	男	女
書道	平川 尚子	20	0	20
弁論	鈴木 瑞穂	8	2	6
JRC同好会	千葉奈緒美	2	0	2
INC同好会	高橋矢壽子	9	2	7